

日本植物学会第 70 回大会に参加して

安 藤 名 央 子

富山大学大学院理工学教育部生物学専攻

2006 年 9 月 13 日に日本植物形態学会、そして 14 日～16 日にかけて日本植物学会第 70 回大会が、熊本大学黒髪キャンパスにおいて開催されました。植物学会は、13 のシンポジウムに、一般発表として合わせて 400 以上の口頭発表やポスター発表が行われる、大きな大会でした。

昨年の植物学会での初めての企画でありました会長主催シンポジウム「樹木を学ぶ」に続き、今大会でも大会初日の朝から「根を学ぶ」と題した会長主催シンポジウムが行われました。根を研究対象にしている私には大変、魅力を感じるもので、朝から非常に期待して参加させていただきました。このような大きな大会において、また学会長主催で根をメインとしたシンポジウムが開催されるということは、植物体における根という器官の重要性を表すものであり、また植物学においてますます根の研究の重要性が増していること、根が持つ魅力の深さ、そして何より根を研究する方々の熱意の大きさを表すものであろうと感じました。

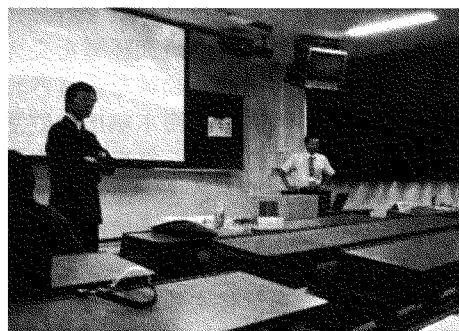
題からもわかるように、シンポジウムの内容すべてが根についての研究報告でした。5 つの講演の題は、「陸上植物の根の進化」(基生研・長谷部光泰氏)、「根における細胞の生長と分化」(富山大・唐原一郎氏)、「植物体内の水輸送における根の役割」(東京大・種子田春彦氏)、「作物の根の環境適応性」(九州大・望月俊宏氏)、「圃場での作物生産における根の役割」(東京大・阿部淳氏)でした。最後に和田正三会長の司会で総合討論が持たれました。根の進化から現在の根の機能や役割、生育条件との関連など、実に幅広い内容の講演を聞くことができました。研究手法も遺伝学的なものから形態学的なものまで用いられていました。どれも興味深く、その内容の多様性から根の機能の多様性と、まだまだ多くの謎があることを知り、改めて根の研究への魅力を感じた時間となりました。様々な研究手法の存在や根の研究の幅の広さを感じ、視野が広がったように感じました。根の魅力に

酔うほどに、自分もまだまだ隠された根の魅力を見つけるべく、研究に励みたいと思いました。会場からの質問では、基礎分野と応用分野の視点のギャップを感じさせるものもありましたが、だからこそこういう情報交換の場の必要性が感じられましたし、会長の意向もそこにあったのだと思われました。

また口頭発表やポスター発表においても、シンポジウム同様、さまざまな発表がなされました。根に直接関するものは口頭発表、ポスター発表を合わせ 20 以上の発表がありました。主に環境応答や形態形成機構の解析に関する発表が多かったように感じました。

根は様々な環境にさらされながらも植物体自身を支え続け、そして作物として私たちの生活をも支えています。実に多様な能力を秘めた根を知るのに、多様な面から根を捉え、研究する必要があることも納得できます。根を知り、学ぶには、あらゆる角度からの知見が必要となるでしょう。今後も根に関心のある多くの人たちがお互いの知識を共有し、根の理解を共に深めていく場がもたれることの重要性を感じました。

今回の学会では、根の役割の大きさ、そして研究の奥の深さを感じ、非常によい刺激を受けることができました。今回の経験を自身の研究に活かし、根の研究に熱中していきたいと思いました。また、広い視野を持ち、幅広く知識を取り込んでいきたいです。



会長シンポジウム「根を学ぶ」にて
和田学会長 (左) と質問に答える阿部先生 (右)